

赤木由子／作

赤羽末吉／え

柳のわた とぶ国

由子

柳のわたとぶ国



赤羽末吉／絵

理論社 JUNIOR LIBRARY

913／柳のわたとぶ国

赤木由子（あかぎ・よしこ）

理論社／1966年初版

262p／23cm／菊判

柳のわたとぶ国

一九七六年二月 第十刷 ©

作者 赤木由子

制作 小宮山量平

発行 山村光司

発行所 株式会社 理論社

東京都新宿区若松町一〇四
電話（二〇三）五七九一（代表）
振替東京九一九五七三六

まえがき
作者

南は地平線までつづく大草原。
東の空にすらなるムーリン山脈。

中国大陸の北方にある古い都で、日本の少女ヨリ子は中国の少女ホウランたちと、草原を馬でかけまわり、冬には大河の氷上をスケートでかけめぐった。

ヨリ子とホウランは、大きくなったら日本の大学へいっしょにいこうと、たのしみになっていた。

しかし、あるとき二つの国の子どもたちは自分たちが敵同志なんだ、ということに気がついた。

気がついたときはもうおそかった。美しい少女ホウランや、そのほかたくさん中国人が日本軍にころされていった。

これは今から二〇年〜三〇年も前のことである。でも、ヨリ子と同年ぐらいの読者のみなさんが、もしそういう立場におかれたらどうするだろう。



もくじ

まえがき 1

1 ナンガンズの家 5

2 悟空ブクウになったヨリ子 19

3 一本の白い道 31

4 アルザとヤナギのわた 45

5 だれを射うつのか 56

6 ロバのばか笑い 64

7 ニンアン・夏の陣じん 72

8 あやしい劇団げきだん 85

9 追われるひとびと 95

10 森の家の少年兵 105

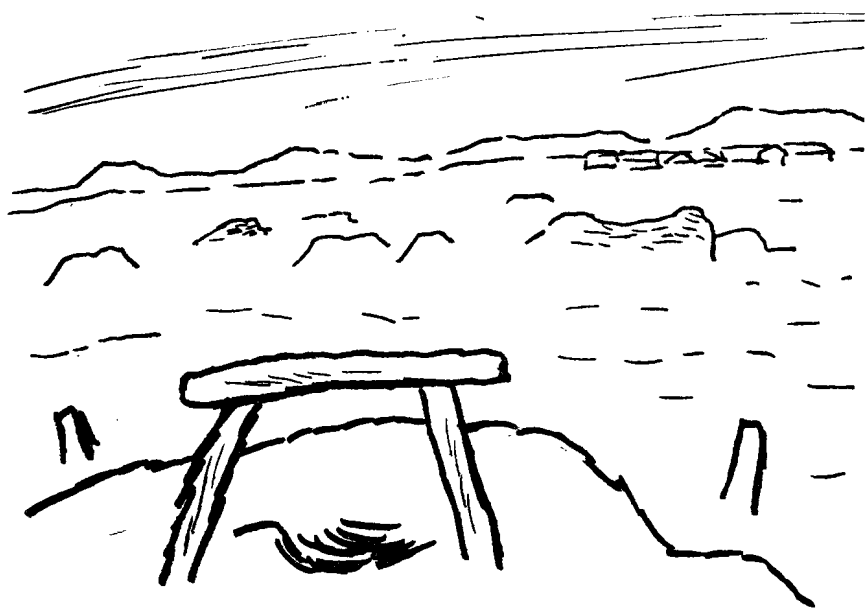
11 一ぴきのノラ犬 118

12 もえる大草原 128



22	21	20	19	18	17	16	15	14	13
あとがき	王虎 ^{ワンフ} のいかり	ホウランの死	チビのあくまたち	まぼろしの町	ろうかはドスドス走ること	氷河にいのる	目をまわした新吉	ひぞくよ逃げろ	むれをはなれた雁 ^{かり}
262	246	237	226	214	202	193	160	147	138
						177			

そうてい・さしえ／
赤羽末吉^{あかば すえきち}





*** 著者紹介 ***

赤木由子（あかぎ・よしこ）

山形県鶴岡市三瀬で生まる／昭和10年中国へわたる／昭和19年当時の満洲国奉天省鞍山市常磐高女卒／昭和21年日本へ帰る／“日通文学” 故田代儀三郎氏に師事す／“新作家協会” 早船ちよ氏、井野川潔氏に師事す

現在／日刊運輸タイムズ社 記者

現住所／三鷹市下連雀508 第2都住521号

1 ナンガンズの家



「ふわあ……ん」

ヨリ子は、これでもう、なん百回目かの大あくびをする。汽車はみわたすかぎりの大草原の中をはしっている。

いなかの村を出て、日本海をわたって、朝鮮の国をとおり、もう《満洲》（いまの中国の東北地方）という国だ。

まわりにすわっているのは、白いふくの朝鮮人と、青いふくをきた満人ばかり。

みんな、うるさくしゃべりあっているが、さっぱり意味がわからない。

ことばの通ずるたった一人のあいてである、しんせきのおばさんは、ねむり病にかかったように、口をあけて、ひるも夜もねむりつづけている。

イビキもちで、それも食用ガエルの声のようなイビキだ。「なんて、でっけえ口だろ、ハエがすいこまれそうだな」ひとりごとをいって、やっと、たいくつを追いはらう方法をみつける。

新聞紙のはしを細くさいて、おばさんのはなのあなにさしこむ。

おばさんの顔が、ゴニョゴニョ、とうごく。それでもおきない。

「しぶとい、あっぱ（おばさん）だの」

紙きれといっしょに、ふーっと、息もふきこんでやる。

イビキだけはとぎれたが、まゆ毛がうねって、ほったの肉が、コブのようにもろあがる。すさまじい顔だ。オニばあとは、こんな顔をしているんだらう。

もうすこしだ。ガサっと、つつこむ、

「こ、このガキッ、なにさらすっ」

おばさんが、くしゃみといっしょにどなる。

そして、おせっきょうをはじめる。

「えっ、おまえ。にんげんというものは、がまんがだいいちだ。おめえは、ガガ（母）もダダ（父）も、おっちんだぞ。あのまんま村にいたら、小学校も、ロクにいかしてももらえねえで、そのうち、子もりっこにやらされるんだ。それを、おめえは運がよくて、満洲のサブロウ兄にもらわれることになっただ。にいさん、ねえさんにきらわれて、追いかえされたら、どうするんだ。ぎょうぎよくできねえのか、イタズラばかり、しくさって、この、ホロケやろう（バカもの）」

それから、ブツブツと、もんくがつづいたが、また、ねむりはじめる。

「ふわあ……ん」

ほんとに、たいくつのために、死んでしまうかもしれないとおもったが、ようやくのことで、目的地のニンアン（寧安）という町の駅につく。

でむかえにきた兄は、チョビひげをはやして、のんきそうな顔をしていた。

この兄とヨリ子は、年が二十もちがう。ヨリ子が、まだ、タタミの上をはいまわっているところに、わかれたままだったので、はじめてみるのとおなじだった。

だが、にいさんというものは、いもうとを、だいにするにちがいない、と思って、すぐ、その手につかまった。

駅前には、馬が三頭もついている馬車がたくさんあって、兄は、ヨリ子をだいて、それにのせた。

馬車は、にぎやかな町をとおらずぎで、右におれたり、左へいたりして、しだいに、しずかなやしき町へはいていく。道の両がわには、いかめしい門がならんでいる。馬車は、村のばあさまが、いつかはなしてくれたことがある、龍宮城りゅうきゅうじょうのような、りっぱな家のまえでとまった。みあげるような門の右がわには、ひらがなで、

《はやかわ・しゃしんかん》

と、かかれたかんばんが、かかっている。

「フエッ、サブロウや、おまえは、こんな、りっぱな、しゃしんやになったのか」

と、おばさんが、むねをおさえた。

兄が、とくいそうにわらう。門をはいって、ヨリ子も、ぎょうてんする。

たかい灰いろのへいにかこまれたやしきの中は、しいんと、しずまりかえり、みどりのしばふのむこうに、白い石だんがあつて、そのうえに、いままで見たこともない、銀いろにかがやくたてものがそびえている。庭の右のほうには、つき山、泉水、あずまやがあり、花がさきみだれて、いいかおりがただよってくる。

左のほうには、へいのうちがわに大木が三本立っていて、あつぽったいこずえに小鳥が、チ、チ、とないている。

（あの木に、のぼらなきやいけない）

ヨリ子は、そのとき、そうおもった。どうして、のぼらなければいけないか、自分だつてわからない。

兄が、石だんのほうへいき、おばさんはきもをつぶしてつたっている。

このすきだ。ヨリ子は、木の根かたへとんだ。

手にツバをつける。だが、ドロップのカンがじゃまで、のぼれない。

村をでるとき、村のともだちの、サイちゃんとヨキちゃんが、せんべつにくれたものだ。ヨリ子は、それを、これからせわになる、ねえさんという人への、みやげにふりかえたのだ。

だから、どんなにほしくても、目をつむって、がまんして、ねているあいだも胸からはなさなかった。

「どうするべ」と、まよった。

おばさんが、気がついて、とんできて、えりくびをつかまえる。

「きょうだけでも、おとなしくしろてばよ。ええか、ここで追いかえされたら、どうにもならんのだぞ、な、いい子だからよ。このおれが、よっく、たのんでやるから。だけんど、まんず、まんず、おめえは、きたねえガキだの、山サルよりひどいわ。こんなガキ、ここの、あねさま、ひきとつてくれるかの。おら、しんばいになってきたぞ」

おばさんが、つくづく、ヨリ子をながめる。

うすよごれたセーラー服に、ぺっちゃんこのゲタ。ボサボサのかみの毛が、目にかぶさっている。

「あっぱや、しんべえ、すんな」

ヨリ子のほうが、おばさんをなぐさめる。

銀いろのたてものから、兄が、女の人をつれて出てくる。うすい、水いろの着物をきて、とおくからでも、美しい人だとわかる。

その人が、近づいてくるにつれて、花のかおりとは、また、べつの、いいにおいが、ながれてくるようだ。

その人が、ヨリ子のまえにくる。

「まあ、ヨリ子ちゃん、とおいところを、よくきてくれたわね。わたしが、ねえさんよ」

おばさんが、米ツキバッタのように、おじぎをはじめ。わけのわからないことを、さかんに、口ばしる。

おばさんが、きゅうに、モグラか、ドブネズミのように、きたなくみえてくる。

ヨリ子が、おばさんの着物をひっぱる。

「あっぱや、きをつけろや。この人は、ねえさんではねえよ、天女だぞ。おれの、マナグ（目）のみるときに、くるいはねえだ」

大人三人が、ぴたっと、しずかになって、顔をみあわせる。兄がふきだす。

「アッハ……。ヨリ子、これ、人間だよ。これが、おまえのねえさんだよ。ねえさんというより、きょうから、おまえのおかあさんだ。にいさんは、おまえの、おとうさんだ。だから、ねえさんに、あいさつしな」

おばさんが、いきおいづいて、しゃべりだす。

「たのみますだ、あねさまよ。このガキはの、ひょうばんのガキ大将での、しかもホロケ（バカ）ときたもんだ。かおも、このとおり、みっともないが、どうか、ひとつ……」

「ねえさん」という人が、おこったような顔をして、

「まあ、おばさん、なにを、おっしゃるの。ヨリ子ちゃん、とても、かわいいじゃありませんか」

「フエッ」

おばさんが一歩うしろへさがる。

どんなもんだい。モグラばあ、ひっこんでろ。ヨリ子は、おもわず、にこりとなる。

「ねえさん、おら、ぶったまげたよ、天女かと、おもったもんで……おれ、ヨリ子だよ。ねえさん、これ、おれからのみやげだ。サイちゃんとヨキちゃんがくれたんだけど、おれ、三つぶなめただけだよ。たべてくんろ」

「まあ、それを、みんなくれるの、わるいわね。どうもあ

りがと、すばらしいおみやげね。ねえさん、だいに、い
ただくわ。さあ、中へはいりましょ。ヨリ子ちゃんのおう
ちだから、おおいばりで、はいっていくのよ」

「うん」

ヨリ子は、ふんぞりかえって、せんとうにたって、石だ
んをあがっていく。

かんげいのごちそう。あたらしい、いろいろな形のふく。
リボンのかかったチヨコレートの箱。

きげんよく、よった兄が、ふと、カベにかかっている世
界地図をみて、

「ヨリ子、きてみる。おまえは、日本海の手つべりの村か
ら、ここをとおって、ここまできたんだよ」

と、ゆびで、たどってみせる。

「ふーん、ちかいんだな。おれの、なかゆびのながさしか
ねえな」

おばさんも、顔を近づけて、

「あれま、日本はたった、これだけかの。それにしても、
満洲とシナ（中国）は、でっけえの」

「あっぱや、たまげたか。これが、ヒコキできたら、日
本から三時間か、せいぜい、四時間しか、かかんよ」

姉がヨリ子をつれて、ろうかのおくの部屋へつれていく。
「ここが、ヨリ子ちゃんのおへやよ。本がたくさんあるで
しょ。それから……」

明るい、ちいさい部屋だ。モザイクのゆかが、しっとり
ひかって、レースのカーテンがゆれている。

「ねえさん、これなんだ？」

「それは、ベッドよ、そこにねるの」

ヨリ子の足にあたたかいものがさわって、キツネの子ど
もみたいなのが、

「イイーッ」

といって、出てきた。

とびのいて、姉のうしろにかくれる。

「キツネだ、おれ、キツネにばかされているんだ、うわー
ん」

すさまじい泣きごえに、兄がとびこんでくる。

「なになに、キツネだって？ バカ、ヨリ子、これは、ノ
ロの子だよ。とつてもかわいいんだぞ。ねえさんが、わざ
わざ、かりうどにたのんで、おまえの、あそびあいてに、
つかまえてきてもらったんだ。メリー、こい、こい」

姉のたもとで、なみだをふいて、姉のわきのしたから、

こわごわのぞく。

メリーのほうも、じっと、ヨリ子をみつめる。

ほっそりした上品な顔。おちよぽ口。くろくて大きな目。皮の、ちいさいハイヒールをはいたような足。まるいしっぱが、パタパタうごいている。

「ウフ……めんごいの」

まるいしっぱが、よけいにパタパタする。

りょうほうから、ひと足、ひと足、近づく。

茶いろのビロードで、きちんと、くるんだようなからだが、まんまえにくる。

メリーが、ひよいとヨリ子の胸に、りょうほうのまえ足をかけて、

「イイッ」と、いう。

「ウフフ……、アハハ……」

「イイッ、イイッ」

つのぶえのようにきれいな声だ。

つぎの朝、ヨリ子は、メリーに、こつん、こつん、たたかれて目をさます。

「おめえ、ゲンコツでたたいたんじゃあんめえな、よくみせろや」

メリーの足をしらべたが、どうもふしぎだ。ヨリ子が四つんばいになると、むきになって、おでこでおしてくる。

「ハハハ……おめえのおでこ、ゲンコツのかわりなんだな、おめえ、女の子のくせに、おてんばだぞ」

メリーが、びよん、びよん、とんでみせる。時計は一〇時一〇分になっている。

ヨリ子は、まだ時計のよみかたをしらない。

「やあ、いまバンザイの時間だぞ。ねぼうしたな、メリー。おれは、きょうから、ニンアンの町を、たんけんするんだよ」

ろうかに出て、部屋をのぞいてまわる。

口の中で、「ねえさん、ねえさん、ねえさんよ」と、いつづける。

ひろまへくると、おおぜいの人の声がする。

ドアをほそくあけてのぞくと、十人ちかくの若い満人^{まんじん}がテーブルをかこんでいて、

「イイエ、ソレワー、イヌデワ、アリマセン、ネコデス」という。中に、犬もネコもない。

はておかしいな。すると、ねえさんが、「ペラペラペラのペラ」と、なにかいう。

満人の一人がヨリ子をみつけて、ドアをゆびさす。姉がふりむいて、

「あら、ヨリ子ちゃん、おきたの。みなさんに、ちょっと、あいさつしなさい」

「ねえさん、なにしてるんだ？」

「この人たちね、学生さんよ。ねえさんが、日本語おしゃべりしてるの」

あいさつがすむと、食堂へつれていかれた。姉が、テーブルに、ごはん、みそしる、ミルク、くだもの、と、いっぱいそろえて、

「ひとりで、たべててちょうだい。台所に、女中さんがいるからね。あとで、おとなりのうちの、ホウランさんと、ホウランさんのお友だちの、ミンホイさんたちに、しょうかいしてあげるからね。二人とも、ヨリ子ちゃんと、おなごいしょよ」

「うん、ねえさん、あっちへ行って、いいよ。おれ、ひとりやるから」

テーブルのうえのものを、きれいにたいらげたが、姉は

まだこない。

「メリーや、ねえさん、いそがしそうだから、おれ、ともだちみつけにくくよ。二人だけじゃすくないから、もっと、さがそうぜ」

門をでて、足のむくまま、南のほうへいくと、牧場があった。

馬がたくさんいる。小馬もいる。小馬を追いかけると、親馬がヨリ子を追いとばす。

牧場のサクをでて、メリーと、かけっこをするうちに、ドロの家が、ごちゃごちゃとかたまっている部落（ぶちく）を見おろせる場所にくる。

「メリー、いたよ。子どもが、うんといるよ。やあ、ドロ水のかけて、してら」

坂みちを、はねおりて行って、

「おめえら、おれも、なかに、へえて、いいか？」

と、いったが、みんなしらんかおしている。

どの子も、はだかんぼだ。いくらたのんでも、「へえれ」と、いつてくれないので、アヒルを追いかけて、ひとりであそぶ。

むちゅうで、アヒルを、ドロまみれにしていると、

目の前に、岩のようなイノシシが、たちふさがる。

「お、お、なんで、こんなところに、イノシシがでるんだよお」

と、いったが、こわくて、からだがうごかない。

イノシシは、体じゅう、まっくろの長い毛をはやし、まるたんぽのような鼻をうごめかして、ヨリ子を、味みしようにする。

「こら、おれのこと、くうな、たすけてえ」

もう、たべられてしまう、と思って、目がつりあがる。それなのに、まわりの子どもたちは、たすけてくれようともしない。

近くの、ドロの家から、女の子が出てきて、ふしぎそうにヨリ子を見る。

そしてイノシシを、おいはらってくれた。その子も、ドロンコだ。

「ありがと、おめえ、なんて、名だ？」

女の子がくびをかしげる。

「よわたたな、さっぱり、ことばがわかんね。うん、そう
だ。あんな、おれ、ヨリ子、ヨリ子だよ。おめえは？」

その子が、ちいさいこえて、

「アルザ」と、いった。

「ひゃ、おめえ、日本語、わかんのか？」

だが、その子は、また、くびをふる。

「メリー、やっぱし、だめだな。おれ、満洲語をならうのがさきだな。とにかく、こんな、ぶっそうなところは、でていこうぜ」

部落を出ると、こんどは、みちがわからなくなった。

ヨリ子は、ふるえあがる。

「おらあ、ひとりで死ぬのやんだ。せっかく、ねえさんにあえたのに、おらあ、やんだ」

泣きくたびれて、あるきくたびれたところ、さっきとおった牧場がみえる。

もう一ど、牧場のサクの中にはいて、じぶんの足どりをかんがえていると、二人の女の子が、手をつないで、

「ヨリ子」

「ヨリ子」

と、よびながらはしってくる。

部落の子どもとは、たいへんなちがいようで、まるで、おひめさまのような女の子たちだ。

「メリーよ、あの子ら、なんで、おれの名、しってんだべ。」

おれの名まえ、満洲まで、なりひびいてたんだかの」

メリーが、くびをかしげる。

二人の女の子のうしろから、姉と兄がやってくる。

「やあ、ねえさん、ねえさん」

兄がフーフーって、

「愛子、こいつに、まいごフタつけとけよ。村にいるところから、とおっぱしりの名人だったんだってよ。浜の小舟を、ひとりで、こぎだしたり、目をはなせないんだとさ」

二人の女の子のうち、いろの白いふっくらしたかわい子子が、ホウランで、すらりと背のたかい、すこし目のきつい子が、この牧場の家のミンホイという子だった。

部落であったイノシシは、ほんとうは、ブタだという。

二人の女の子とは、すぐ、なかよしになって、まいにちいっしょにあそんだ。

そして、夏休みがおわるころ、三人そろって、ヨリ子の姉のところへいき、

「いっしょの学校へいかしてよ」

「そうだよ、おれ、満洲語うまくなったよ」

「ねえ、ヨリ子のおねえさん、ヨリ子を、わたしたちの、

精華せいけがくえんに、いれようよ」

姉が、ニコニコして、

「それが、だめなのよ」

「どうしてさあ？」

「日本人は、日本人小学校にいくのよ」

「いやだあ、ホウランの学校へいくよ」

「だって、役場で、きょかしなもの」

姉につれられて、くさい顔をして、日本人小学校の、一年生の教室へはいると、

「わっ、へんな子がきたよっ」

と、みんなではやしたてる。

姉が、先生にあいさつをして、先にかえり、うしろのあいたせきにすわられる。

あちこちで、

「女のくせに、おれ、だつてさ。ズーズーべんの、いなかっぺのくせに、満人の、金もち学校へいきたがるんだつてよ」

「この子、ブタにのっかって、あそんでるの、みたことあるわ」

「あら、わたしは、この子が、このあいだ、駅の給水塔にのぼって、満人のけいさつに、追いかけられているの、みたわ」

「まあ、この子、日本人だったのね。このあいだ、満人のおぼろさんと、いっしょに、おきょうをあげて、まわってたわよ。うちにもきたから、おコメ一合、だしてやったのよ。あんた、わたしをみたことあるでしょ？」

ヨリ子は、しかたなくうなづく。だが、はらの中は、ぶんむくれだ。

「ようし、おぼえてろ、一時間、おわったら、こんな学校、こっちからおサラバだ」

休み時間になると、みんながどっと、あつまってきて、逃げるすきがない。

「あんた、どうして給水塔にのぼったの？」

「あんた、どうしておぼろさんとあるいてるの？ あんたのうち、おコメないの？」

なにをいわれても、天井をにらんでいる。逃げるよりも、こんどは、おしっこがしたくなった。

だんだん、からだがふるえてくるのに、女の子たちがしつこくこづいて、はなれない。

あけてある窓から、トンボが二匹はいつてきた。窓ぎわにたつて、足をくんで、ヨリ子が、なぶりものにされていのを、だまってみていた男の子が、

「わーっ、わ、わ、トンボのはしりだ、つかまえろ」

と、いって、トンボが、ついと、外へでると、じぶんから窓をのりこえて、追いかけていく。

ほかの男の子も、みんなそのあとにつづき、残った女の子のほうは、《英子さん》という女王バチみたいなのが、レースのハンカチを、ヨリ子の顔のまえで、ふってみせ、

「ああ、こんな、いなかっぺ、つまらないわ。おてあらいにいきましょ」

といい、ほかの子が、

「ええ、英子さん、まいりましょ」

と、こたえて、ゾロゾロ、出ていく。

ヨリ子がかんがえる。《おてあらい》って、なんだろう。ただ、手をあらうだけで、どうして、みんなで、くっついていくんだろ。

「それどころじゃないよ」

ヨリ子がひとりごとをいう。便所へいきたいのに、姉がおしえてくれた《便所》ということばをわすれてしまった。